西南学院大学　国際文化論集　第36巻　第２号　27－39頁　2022年３月

日本プロテスタント史を読み解く（2）

塩　野　和　夫

第３章　来日宣教師

はじめに

近代日本にプロテスタントキリスト教をもたらしたのは欧米のキリスト教宣教師である。そこで明治期に来日した宣教師を３つのグループに分けて活動内容を分析し，それぞれに対して解題を入れる。３つのグループは次の通りである。

第１グループ
　グリーン，D.C.（Greene, D. C., 1843～1913，1869年来日）
　ギューリック，O.H.（Gulick, O. H., 1830～1923，1871年来日）
　ゴードン，M.L.（Gordon, M. L., 1843～1900，1872年来日）
第２グループ
　デフォレスト，J.K.H.（DeForest, J. K. H., 1844～1911，1874年来日）
　オールチン，G.（Allchin, G., 1852～1935，1882年来日）
第３グループ
　シュピンナー，W.（Spinner, W., 1854～1918，1885年来日）
　シュミーデル，O.（Schmidel, O., 1858～1926，1887年来日）

第１グループと第２グループの５名はいずれもアメリカンボードの宣教師である。同じ団体に所属する彼らを２グループに分けた理由は何なのか。それは

来日時の違いである。第１グループはキリスト教禁教の高札が立てられていた時期に来日している。したがって，彼らは日本宣教開始当初の宣教師である。

それに対して第２グループは高札撤去後に来日し，活動している。このような来日時の違いが彼らの活動に与えた影響は何なのかを分析したい。

第３グループは普及福音新教伝道会の宣教師で，ドイツから派遣されていた。派遣先のアメリカとドイツ，この違いは彼らの活動内容に決定的な差異を与えていた。それが何なのかを検討したい。

第１節　日本宣教の開拓者

（1）グリーン

マサチューセッツ州ロックスベリーに生まれる。父デービット（Greene, David, 1797～1866）はアメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の幹事を務めた（1832-48）。1860年，バーモント州にあるミドルベリー大学に入学するが，翌年ニューハンプシャー州のダートマス大学に移った。在学中の62年にダートマス騎兵隊に入隊し，北軍として参戦している。64年に卒業すると，ウィスコンシン州バルマイア，ミシガン州ウォキーガンで教育活動に従事し，牧師への志を強めた。66年にシカゴ神学校へ入学，宣教師になる決意を固めた。翌年アンドーヴァー神学校に移り，69年に卒業する。同年７月にメアリー（Forbes, Mary Jane, 1845-1910）と結婚，11月にはアメリカンボードが日本に派遣した最初の宣教師としてサンフランシスコを出航している。

1869（明治２）年11月下旬に横浜へ到着した。12月には江戸へ移り，ヘボン（Hepburn, James Curtis, 1815-1911），フルベッキ（Verbeck, Guido Herman Fridolin, 1830-98）らと交流する。日本における宣教活動を模索した時期で，何よりも任地の問題があった。候補を江戸か兵庫（神戸）に絞り，70年３月にブロジェット（Blodgett, Henry）の勧めを受けて決定した神戸へ移転する。次いで禁教令布告下で取り組んだのが外国人礼拝である。71年６月に日本語教師の市川栄之助と妻まつがキリスト教入信の容疑を受けて逮捕され，釈放のため奔走した。在日アメリカンボード宣教師団最初の総会を72年１月に開き，初代会

長となる。72年12月には神戸の宇治野村（神戸市中央区下山手通８丁目付近）で英語学校を開いた。

切支丹禁制の高札撤去（73年２月）が転機となり，宣教活動の可能性は広がった。そこで，神戸元町通に開店したキリスト教書を扱う書店（73年２月）で９月から礼拝を，11月からは日曜学校を始めている。74年４月に松山高吉・市川まつなど11名が洗礼を受け，摂津第一公会（現在の日本基督教団神戸教会）は誕生した。グリーンは初代仮牧師に就任している。ところが，第１回宣教師会議（72年９月）において組織された横浜翻訳委員会の作業に着手するため，74年６月に松山高吉を伴って横浜に移る。ブラウン（Brown, Samuel Robbins, 1810-80）・ヘボンと共に委員会の書記兼会計として責任を果たしている。分冊を順次出版し，80年４月に元訳と呼ばれる新約聖書を刊行した。

1881年に京都へ移り，同志社の邦語神学科で神学・旧約聖書の釈義と英文学を教える。その間，学生の声に耳を傾けて研究環境の整備に努め，経済的課題を抱えた者には配慮を示した。他方，頌栄館・同志社チャペルと有終館の建設に関しては設計監督者として責任を負った。同志社に対しては教育現場を離れた後も理事として関わっている（1899-1911）。

1890年に東京へ移り，アメリカンボード宣教師団や日本組合教会の活動に協力した。社会的関心も強く，97年には片山潜による神田でのキングスレー館建設を支援している。日本アジア協会の会長や平和協会会長も務め，日米の相互理解と関係改善に努めた。

神奈川県葉山で死去する。グリーン夫妻の墓は東京青山霊園にあったが，2001（平成13）年11月に京都市若王子の同志社墓地に移されている。

〔文献〕E. B. Greene, *A New-Englander in Japan, Daniel Crosby Greene*, 1927.
茂義樹『明治初期神戸伝道とD.C.グリーン』1986

（2）ギューリック

アメリカンボード宣教師ギューリック（Gulick, Peter Johnson 1796-1877）とファニー（Gulick, Fanny 1798-1883）の次男としてホノルルに生まれる。オア

フ大学を卒業して，1855年にアンナ（Clark, Anna Eliza 1833-1938）と結婚した。62年に按手礼を受け，71（明治４）年３月に妻のアンナと共にグリーン（Greene, D. C.）夫妻に続く二組目の宣教師として神戸に到着した。

1872（明治５）年５月に第１回京都博覧会が開催されていた京都を訪ねる。市内での借家に成功して宣教の可能性を探ったが，６月には退去させられて失敗する。７月に大阪へ移り，10月の大阪ステーション開設に参加した。73年１月にはゴードン（Gordon, M. L.）と共に大阪与力町に英語塾を設立している。74年に神戸ステーションへ移る。75年７月には三田公会を設立して仮牧師に就任し，12月に『七一雑報』を創刊している。

1880年３月に横浜を出航してアジア・ヨーロッパ・アメリカ合衆国を回り，82年３月に日本へ帰国した。その間，世界各地の様子を『七一雑報』の第５巻24号から第７巻16号まで33回にわたって伝えた。一連のシリーズは『O・H・ギュリキ絵入世界周遊記』として出版されている。

1883年に新潟ステーションへ，85年には岡山ステーションへ移動し，87年には開設された熊本ステーションに移っている。熊本では熊本英学校と熊本女学校における英語教授をはじめ，積極的に宣教活動を行った。また，九州各地を対象とした巡回伝道に夫婦で参加している。さらに日本における経験が豊富であったため，各地のステーションにおける活動を指導した。

1892年７月にアメリカへ帰国すると，ハワイにおける日本人への宣教活動に従事した。ホノルルで永眠している。

（3）ゴードン

アメリカ合衆国ペンシルヴァニア州のウエインスバーグ（Weynesburg）で生まれる。ウエインスバーグ大学在学中に南北戦争が起こり，父と共に義勇兵として３年間北軍に従軍した。復員して大学に戻るが，神学研究を志しアンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）に入学する。神学校を卒業した1870年からは宣教医を目指してニューヨーク大学で医学を学んだ。医学士（Bachelor of Medicine）を取得した72年にアグネス（Donald, Agnes Helen 1852-

1940）と結婚した。カンバーランド長老キリスト教会に所属していたが，アメリカンボードの宣教医として妻と共に日本を目指した。

1872（明治５）年９月，横浜に上陸する。京都を訪問して10月に大阪へ入り，ギューリック（Gulick, Oramel Hinckly）と大阪ステーションを設立した。73年にはゴードン宅で学校を始め，同年３月から開始した安息日礼拝は74年５月の梅本町公会（現在の日本基督教団大阪教会）設立に至った。初代の仮牧師はゴードンである。なお，大阪滞在中に目を患い，これが宣教医断念の一因となった。

1875年春に当時京都府顧問であった山本覚馬（1828-92）に Martin, W. A. D., *Evidences of Christianity*，の漢訳『天道遡源』を贈り，キリスト教信仰に導いている。新島襄は78年に同志社へゴードンを雇い入れるため府庁へ願書を出していたが，再度願い出て許可がおりる。そこで79年にゴードンは家族と共に京都へ移り，同志社で教えた。担当した科目は説教学・牧会学で，讃美歌も教えている。彼はまた学生と共に地方における伝道活動に従事し，丹波では亀岡・青土・船枝・殿田・胡麻・園部で伝道集会を開いている。85年１月には四条教会（現在の日本基督教団京都教会）の設立に協力した。

妻のアグネスはゴードンの活動を支え，夫の死後も伝道活動・教育活動・社会活動への協力を続けた。日本組合基督教会は総会決議を以て，彼女への謝意を表している。ゴードンは大阪滞在時から日本語や日本文化への関心を示し，随筆・詩歌・俳句を作っている。琵琶湖を歌った英詩“Over Biwa Lake”は同志社の学生に吟唱された。日本の仏教についても幅広く研究した。

1899年に病のために帰国し，マサチューセッツ州オーバンディルで死去した。アグネスは1940（昭和15）年10月に帰国，カリフォルニア州バサティアで亡くなっている。

（4）第１グループの解題

第１グループの３名を来日するまでの経歴で見ると，それぞれに個性がある。グリーンとゴードンは東北部の出身で，南北戦争でいずれも北軍に参加してい

る。それに対してギューリックは，ハワイ生まれのハワイ育ちである。両親がアメリカンボードの関係者であったグリーンとギューリックに対して，ゴードンはカンバーランド長老教会に所属し，宣教医を目指していた。ただし，結婚して間もなく宣教師として夫妻で日本を目指したことで３人は共通している。

日本における宣教活動も多彩で個性がある。来日以来，宣教活動を模索していたグリーンは神戸に開店した書店を手掛かりとして礼拝を始め，1874年４月に組合教会最初の摂津第一公会を設立し初代仮牧師に就任した。その後，聖書翻訳事業に参加し，同志社における教育事業や社会活動にも関心を示した。大阪・神戸・新潟・岡山・熊本で伝道活動に参加したギューリックは75年７月に三田公会の設立に協力し仮牧師に就任している。また『七一雑報』の創刊に加わり，出版にも協力している。74年５月の梅本町公会設立に協力し初代仮牧師に就任したゴードンは同志社の教育に参加しただけでなく，学生たちの丹波地方における伝道活動にも積極的に協力した。彼はまた日本文化への関心を示し続けている。

多彩な宣教活動の中心に開拓伝道があり，教会設立に協力したことでも３人は共通している。これはアメリカンボードの宣教方針に沿った活動であった。同時に教育活動への参加においても共通していて，グリーンとゴードンは同志社の教育活動に，ギューリックは熊本英学校と熊本女学校の教育活動に参加している。これらは宣教活動において教育が重要な役割を果たしていた現実に対応している。

伝道活動が宣教の重要な要素として３人に共通して認められる一方で，それぞれの個性が認められる取り組みもあった。すなわち，グリーンにおける社会的弱者に対する配慮などに認められる社会活動，ギューリックの『七一雑報』発行事業への協力や『O・H・ギュリキ絵入世界周遊記』出版に顕著な出版事業との関わり，随筆・詩歌・俳句を作ったゴードンに見られる日本文化への関心である。これらの取り組みに彼らの個性がにじみ出ている。しかし，第２グループに属する宣教師と比べると大きな展開は見られない。

第２節　日本宣教の文化的展開

（1）デフォレスト

コネティカット州ウエストブルックの牧師家庭に第５子として生まれる。幼名をハイド（Hyde, John Kinne）といった。村の小学校で教えていたが，17歳の時フィリップスアカデミーに編入学し1862年に卒業している。南北戦争における北軍への従軍やニューヨーク州アーヴィングでの教師生活を経て，64年にイエール大学に入学した。在学中にデフォレスト奨学金を受けて，姓をデフォレストと変える。

大学卒業後，学びを続けてイエール大学神学校の履修を終えた71年に按手礼を受けて，ニューヘイブン近郊のマウントカルメル教会（Congregational Church at Mount Carmel）の牧師に就任した。ところが，着任間もなく結婚したサラ（Conklin, Sarah C.）を出産にあたって失う悲劇に打ちのめされ，牧師を辞任する。しかし，静養の時を教会員の見守りの内に過ごし，牧師に復帰した。74年９月にサラ（Starr, Sarah Elizabeth）と再婚，10月にバーモント州ラットランドで開かれたアメリカンボード第65回年会で宣教師として任命される。年会には新島襄も出席していた。

1874（明治７）年11月に横浜に到着する。大阪ステーションに所属し，日本語の習得に努めながら，日本文化に深い関心を寄せた。大阪における組合教会の宣教と教育の活動に従事しただけでなく，５ミッション（カンバーランド長老教会，アメリカ聖公会，英国聖公会伝道会社，アメリカ長老教会，アメリカンボード）の協力による大阪基督青年会館の建設に尽力した。大阪の川口居留地にいた77年に長女サラ（Sarah），79年に二女シャーロット（Charlotte），85年に三女ルイーズ（Louise）が誕生し，それぞれ中国・神戸女学院・同志社女子部で活躍している。その後に生れた長男のジョン（John）は早くに亡くなった。

1886年11月に宮城英学校が仮開校されたのを機に仙台へ移り，仙台ステーションに所属し東北地方における宣教と教育活動に従事した。新島襄を校長とする宮城英学校は87年６月に東華学校として正式に開校したが，92年に閉校している。1905（明治38）年から翌年にかけての東北飢餓に際しては救済活動に

あたった。

1907年から全米各地で日本文化と社会の紹介をしている。08年にアメリカで起こった反日運動に対しては日米友好関係推進の必要性を訴えた。著作活動にも取り組み，『西教十誡真論』（81），『十二使徒教訓』（84），『耶蘇基督の特性』（88），『禁酒論』（98），『戦争と宗教』（05）など，30冊を越える小冊子を出版している。

東京の聖路加病院で亡くなる。1914年に仙台組合教会はデフォレスト記念会堂を竣工した。仙台の北山輪王寺外国人墓地に葬られている。

（2）オールチン

イギリスのロンドン南東部ケント地区にあるプラムステッド（Plumstead）に生まれる。1872年にカナダへ渡り，77年にはアメリカに移住した。80年にメイン州のバンカー神学校（Bangor Theological Seminary）を，81年にはマサチューセッツ州にあるウィリアムズ大学（Williams College）を卒業した。1882（明治15）年11月にアメリカンボードの宣教師として妻のネリー（Allchin, Nellie Stratton 1860−1921）を伴って来日，大阪に上陸する。

大阪ステーションに所属しながら，精力的に巡回伝道に従事した。幻燈を携えて訪ねた地域は全国に及ぶ。1899（明治32）年に出張した松山ステーションでは12の町で21回の幻燈講演会を実施し，22,360人の参加者があった。16回の劇場における幻燈講演会の前後では説教会を行い，4,700名が参加した。幻燈講演会で販売した『ほととぎす　放蕩息子の話』（1900年）や『世はなさけ *The good Samaritan*』（1900年）はオールチンの著作である。

教育・教会活動としては宮城英学校の設立（86年11月，東華学校の前身）や日本組合大阪九条教会の創立（1906年）に協力した。

教会音楽の場でも活躍し，1888年に日本基督教会（長老・改革派）と組合教会共通の『新撰讃美歌』製作に協力する。91年には日本で最初のオルガン教本となる『風琴教授詳説』を出版した。1900（明治33）年に日本における讃美歌に関する研究論文『日本における讃美歌』（*Hymnology in Japan.*）を発表し，

翌年出版した。03年には日本基督教会・組合教会・メソジスト教会・浸礼教会・基督教会（ディサイプルズ）共通の『讃美歌』編集作業に委員として参加した。

宣教師を引退し帰米する際（20年）には収集した讃美歌資料を神戸女学院に寄贈し，オールチン・コレクションと呼ばれている。ニューヨークで亡くなる。

〔文献〕手代木俊一『明治と讃美歌　明治期プロテスタントの讃美歌と聖歌の諸相』

（3）第２グループの解題

デフォレストとオールチンはいずれも30歳で来日しているが，日本に来るまでの経歴は全く異なっている。アメリカ北東部の牧師家庭に生まれたデフォレストは苦学してイエール大学神学部での学びを終え，牧師をしていた。ところがその時に妻のサラ（Conklin, Sarah C.）を失う悲劇に打ちのめされ牧師を続けることができなくなり辞任した。しかし，教会員の祈りに支えらて復職しサラ（Starr, Sarah Elizabeth）と再婚し，宣教師して来日した。イギリス生まれのオールチンはカナダ・アメリカへと移住を繰り返している。この経験が彼のアイデンティティに大きな影響を与えないわけがない。それらの経験を経てアメリカ北東部の神学部と大学で学び，宣教師として来日している。オールチン来日後の文化的に多大な影響を与えた活躍が若い日の魂の遍歴を推測させている。

日本における宣教活動においても両者には違いがみられる。大阪で12年，仙台で20年余り，アメリカでも各地を回って日本の紹介をしたデフォレストは地域社会に根づいた活動を展開した。仙台における活動を記念して仙台組合教会は新会堂をデフォレスト記念会堂と名付けている。それに対して，オールチンは大阪ステーションに属しながらも幻燈を携えて全国各地を精力的に巡回伝道した。また，帰米に際して神戸女学院に寄贈した讃美歌資料はオールチン・コレクションと名付けられている。

彼らには開拓者たちの活動に顕著な日本社会への情熱が継承されている。それにもかかわらず，文化的な装いを伴った宣教の方法において決定的な違いが認められる。それがデフォレストの場合には『西教十戒真論』を初めとした30冊を越える小冊子の出版であり，オールチンでは幻燈を携えた巡回伝道であり，教会音楽への貢献もある。

第３節　日本宣教の思想的展開

（1）シュピンナー

スイスのチューリッヒで改革派国教会の牧師家庭に生まれる。チューリッヒの大学において哲学と神学を学んだ後，ドイツ・デンマーク・オランダ・ベルギーで研鑽を積む。1878年にチューリッヒ改革派国教会の牧師に就任し，勤務する傍ら研究活動も続けた。84年，ドイツのヴァイマルで結成された普及福音新教伝道会（Allgemeiner Evangelisch- Protestantischer Missions-verein）の創立に参加する。ルター派のザクセンヴァイマル国教会の牧師として，また普及福音新教伝道会最初の宣教師として日本に来た。1885（明治18）年９月である。

来日すると直ちに活動を開始し，10月には東京府の教区として東京ドイツプロテスタント教会を組織し，ドイツ学校（独逸学協会学校）でもドイツ語と歴史を教え始めている。当初の生徒に「（４年生）イシハラ，（５年生）磯田，三並，タケニシ，伴，（６年生）フルショウ，サカタ，アリタ，ナリタ，（７年生）フナコシ，イイダ」がいた。11月に東京のユニオンチャーチ（築地明石町）で，12月には横浜のユニオンチャーチでそれぞれ初めてのドイツ語礼拝を行っている。87年に文京区小石川に壱岐坂教会（本郷壱岐坂普及福音教会，現在の日本基督教団上富坂教会）を設立し，新教神学校（東京新教神学アカデミー）も開設した。神学校は４年８ゼメスター制で「ドイツの福音主義神学大学」を手本として教育する。神学校内には伝道者の短期養成コースとして伝道者学校も設けた。

1888年６月から８月にかけて「その地でドイツ人教会を設立し，京都では日本の教会を設立」することを目的に関西へ出張した。神戸のユニオンチャーチ，

京都ではドイツ学校を中心に活動する。しかし，すでにドイツ人学校や組合派の教会が活動していた事情もあって目的は達成できなかった。東京に帰ると，９月に壱岐坂教会内で「倫理的，宗教的問題を語り合うためのドイツ語を解する学生の会」を設立する。同じ頃，貧しい女性の家計を助けるためにレース教室も設けた。89年６月には壱岐坂教会青年会を立ち上げて毎月会合を重ねた。10月には三並良と丸山通一の協力を得て普及福音教会の機関誌『真理』（月刊誌）の刊行を始め，神学的主張を展開した。90年10月には芝講義所の開所式を行っている。

1891年２月から３月にかけて普及福音伝道会が活動していた上海を訪問し，神戸と京都を経由して東京に帰っている。４月１日に横浜を出港して，ドイツに帰国した。ドイツでは91年からイルメナウ教区監督を，96年からはヴァイマル公国の宮廷主席説教師を務めている。

〔文献〕H.E.ハーマー編，岩波哲男・岡本不二夫訳『明治キリスト教の一断面 ― シュピンナーの『滞在日記』―』1998

（2）シュミーデル

ドイツ東部のザクセン州ツァウケローデに生まれる。ライプツィヒ・イエーナ・ハイデルベルクで，旧約聖書学・歴史学・史的イエス・ドイツ観念論について学んだ。1885年よりアイゼナハのギムナジウムで宗教・ドイツ文学・ヘブライ語を教え，普及福音新教伝道会（Allgemeiner Evangelish－Protestanischer Missions - verein）の設立に参加する。シュピンナー（Spinner, Wilfried）に次ぐ２人目の宣教師として，1887（明治20）年10月に妻のマリーを伴って来日した。

東京の駿河台に住み，壱岐坂教会（本郷壱岐坂普及福音教会，現在の日本基督教団上富阪教会）の牧師を務め，新教神学校（東京新教神学アカデミー）とドイツ人学校（独逸学協会学校）で教えた。新教神学校では旧約聖書神学・新約聖書神学・宗教学等を担当する。講義は学生との討論を交えながら教え，彼らの主体的な思考力と研究心を育てた。自宅にも招くなどして交流を重んじ，

教育に心を砕いた。学生には三並良・向軍治・丸山通一・深井英五・佐藤徳介・宮入慶之助・古谷新太郎がいる。東京キリスト教青年会の機関誌『六合雑誌』や89年10月に創刊した普及福音新教伝道会の機関誌『真理』において，聖書の歴史的研究の重要性などに対する立場を明らかにした。このような主張に対して，日本のキリスト教界からは新神学と位置付けられた。

著書に『奇蹟詳論』（91年，三並良訳），『インスピレーション詳論』（92年，深井英五訳），『黙示録概論』（94年，小川尚義訳）がある。92年11月に帰国した。

ドイツでは93年からイエーナ近郊のゲッテルで牧師を務め，95年から1924年まではアイゼナハのギムナジウムで教えた。アイゼナハで亡くなる。

〔文献〕三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』（1935年）

(3) 第３グループの解題

来日前のシュピンナーとシュミーデルには多くの共通点を見ることができる。スイスの牧師家庭に生まれたシュピンナーは大学で哲学と神学を学び，牧師職に就いていた。ドイツ東部の町に生れたシュミーデルは旧約聖書・歴史学・史的イエス・ドイツ観念論を学び，ギムナジウムで宗教・ドイツ文学・ヘブライ語を教えていた。要するに彼らのキリスト教においては神学的・思想的な特色が際立っている。

この傾向は来日後においても顕著で，シュピンナーは教会（壱岐坂教会）と神学校（新教神学校）を主な活動の場とした。伝道者の育成にも務め，機関誌『真理』では神学的な主張をしている。シュミーデルも教会と神学校を主な活動の場として，神学生の育成にも力を尽くしている。機関誌『真理』では聖書の歴史的研究の重要性を訴えている。

彼らの神学的立場はドイツにおいて広く認められる学問的傾向に根差していた。それは実践的な伝道活動を重んじたアメリカの海外宣教活動とは異質であり，思想において特色があったために新神学と呼ばれた。

おわりに

３グループに分けた７人の宣教師はグループごとに特色を持った活動を展開した。

日本宣教の開拓者であった第１グループは伝道活動に情熱を注ぎ，教育活動にも取り組んだ。日本宣教に文化的展開を与えた第２グループは伝道活動への情熱を継承しながらも文学や幻燈，音楽活動に打ち込んだ。日本宣教への思想的展開を示した第３グループは機関誌『真理』によって神学的主張や聖書の歴史的研究の重要性を主張した。

それにしてもなぜグループごとの違い，特に第１・第２グループに対する第３グループの違いが生まれたのか。そこには歴史的背景がある。アメリカンボード成立の契機として1790年代にアメリカ北東部で発生した第２次大覚醒運動における伝道への情熱が指摘されている。他方，普及福音新教伝道会の精神的基盤として認められているのが理性と自由，革新を重んじる啓蒙主義である。

彼らはわずか３グループ７名にすぎなかった。しかし，３グループに認められる特色に近代日本プロテスタントの基本的な構造を読み取ることができる。それほどに３グループの宣教師が与えた影響は大きかったと言える。